



Alan GILBERT

Principal Guest Conductor

アラン・ギルバート
首席客演指揮者

12/10 12/11 12/18 12/19

© 堀田力丸

2018年4月に都響首席客演指揮者へ就任、7月に就任披露演奏会を行った。2019年9月にNDRエルプフィル（北ドイツ放送響）首席指揮者へ就任予定。ロイヤル・ストックホルム・フィル桂冠指揮者、ジュリアード音楽院指揮・オーケストラ科ディレクター。

2017年まで8シーズンにわたってニューヨーク・フィル音楽監督を務め、芸術性を広げる活動が高く評価された。ベルリン・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウ管、シュターツカペレ・ドレスデン、パリ管、クリーヴランド管、ボストン響などへ定期的に客演。オペラではメトロポリタン歌劇場、チューリヒ歌劇場、スウェーデン王立歌劇場、サンタフェ・オペラなどへ登場した。メトロポリタン歌劇場とのDVD『ドクター・アトミック』（Sony Classical）、ルネ・フレミングとのCD『ポエム』（Decca）でグラミー賞を獲得。

都響とは2011年7月に初共演、2016年1月・7月、2017年4月と共演を重ねて大きな喝采を浴び、首席客演指揮者就任が実現した。

Alan Gilbert is Principal Guest Conductor of TMSO, Conductor Laureate of Royal Stockholm Philharmonic, and Director of Conducting and Orchestral Studies at Juilliard School. He will be inaugurated as Principal Conductor of NDR Elbphilharmonie Orchester in September 2019. Gilbert was Music Director of New York Philharmonic between 2009 and 2017. He makes regular guest appearances with orchestras including Berliner Philharmoniker, Royal Concertgebouw Orchestra, Sächsische Staatskapelle Dresden, Orchestre de Paris, Cleveland Orchestra, and Boston Symphony. He has appeared at Metropolitan Opera, Oper Zürich, and Royal Swedish Opera, among others.

B Series 第868回 定期演奏会Bシリーズ

Subscription Concert No.868 B Series

サントリーホール

2018年12月10日(月) 19:00開演

Mon. 10 December 2018, 19:00 at Suntory Hall

T TMSO 都響スペシャル

TMSO Special

サントリーホール

2018年12月11日(火) 19:00開演

Tue. 11 December 2018, 19:00 at Suntory Hall

指揮 ● アラン・ギルバート Alan GILBERT, Conductor
コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

メンデルスゾーン：序曲《フィンガルの洞窟》 op.26 (11分)
Mendelssohn: "Fingal's Cave", Overture, op.26

シューマン：交響曲第1番 変ロ長調 op.38 《春》 (30分)
Schumann: Symphony No.1 in B-flat major, op.38 "Spring"

- I Andante un poco maestoso - Allegro molto vivace
- II Larghetto
- III Scherzo: Molto vivace
- IV Allegro animato e grazioso

休憩 / Intermission (20分)

ストラヴィンスキー：バレエ音楽《春の祭典》 (35分)
Stravinsky: Le Sacre du Printemps

- I L'adoration de la Terre 大地礼賛
- II Le Sacrifice 生贄

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

シリーズ支援：● 明治安田生命 (12/10)

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業) (12/10)

文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

メンデルスゾーン： 序曲《フィンガルの洞窟》op.26

裕福な銀行経営者の長男として、ドイツのハンブルクに生まれたフェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）。自宅のサロンに芸術家や学者が日常的に出入りする環境のもとで深い教養を身につけながら育ち、音楽の分野では神童の才を認められた。そんな彼を“我々の世のモーツァルト”と呼んだのは誰だろう、ローベルト・シューマン（1810～56）である。

1829年の4月、メンデルスゾーンはイギリスに初訪問を果たした。彼の名が既に“若き大家”として知れわたっていたロンドンでは、自作を交えた演奏会を指揮して大喝采を受ける。

7月中旬にロンドンを離れた後、友人とスコットランド旅行に出かけた。同地方の西海岸沖に広がるヘブリディーズ諸島の玄関口となるマル島まで足をのぼしたのが8月7日。その夜、姉ファニー（1805～47）宛にしたためた手紙の中で「僕がどれほど感銘を受けているか、頭に浮かんだものをお目にかけてみましょう」という言葉とともに、現在の《フィンガルの洞窟》の冒頭部分にあたる楽想が書き記されている（通説とは異なり、洞窟そのものを見る前に楽想を得ていたらしい）。マル島から約10キロ西方のスタファ島で、フィンガルの洞窟として名高き景勝地に降り立ったのは翌日のことである。高さ十数メートルの壁を埋め尽くす六角柱状の玄武岩。洞窟内にこだまする波や風の音……。

こうした印象も靈感の源泉としながら、翌年の秋以降にメンデルスゾーンは演奏会用序曲の筆を進めていく。作品は1830年12月16日に完成したが、その後の改訂を経て初演を迎える過程でタイトルは二転三転。1835年の出版時には《ヘブリディーズ諸島（Die Hebriden）》に落ち着き、しかしそれはなぜかパート譜にのみ印刷され、スコアは《フィンガルの洞窟（Fingals-Höhle）》と題名を掲げていた。後者が通称として用いられることも多く、日本では古くからその形で定着を見ている。

ソナタ形式で書かれた曲は、序奏などを伴わずにいきなり第1主題から始まる。そのどこか荒涼とした空気感に対して、温もりを備えた動機群に導かれる第2主題が実に鮮やかなコントラストをおりなす。そしてほぼ全曲を一貫して、旋律声部の背後で長い持続音や起伏の細かい伴奏音形が鳴り響き、それが潮風や波のうねりを連想させずにはおかない。メンデルスゾーンの作風に批判的だったりリヒルト・ワーグナー（1813～83）ですら、「音による風景画として第一級」と讃辞を呈したほどである。

（木幡一誠）

作曲年代：1830年 1832年改訂

初演：1832年5月14日 ロンドン

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

シューマン： 交響曲第1番 変ロ長調 op.38《春》

ローベルト・シューマン（1810～56）の創作活動には大きな特徴があった。それはある一定の時期に一定のジャンルの作品を集中的に書くことである。例えば1840年は歌曲の年、1842年は室内楽の年というように。そしてそこに挟まれた1841年は交響曲の年と呼ばれ、この第1番と第4番（初稿）、《序曲、スケルツォとフィナーレ》などが書かれた。

もっともシューマン自身の交響曲への関心はそれ以前からもあったようだが、彼自らが発見し、その初演をメンデルスゾーンに託したシューベルト最後の交響曲《ザ・グレート》を聴くことによって、一気に交響曲の創作意欲に火が点いたようである。その勢いを裏づけるかのように、スケッチはわずか4日で完了し、オーケストレーションを含め作曲は1ヵ月弱で終了している。また友人であるアドルフ・ベツトガー（1815～70）の詩「汝、雲の精よ」の最終部分、「谷間には春が萌え上がる」にも啓発されたとのことである。それゆえ当初は、各楽章へ「春の始まり」「夕べ」「楽しい遊び」「春たけなわ」といった標題を与えていた。

第1楽章 アンダンテ・ウン・ポーコ・マエストーソ、変ロ長調、4分の4拍子の序奏と、同じ調性でアレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ、4分の2拍子の主部から成る。主部はソナタ形式。金管による冒頭のファンファーレは、短縮されて主部の第1主題前半となる。第2主題は陰影深い和声がかかにもシューマンらしいが、それほど重要な役割は持たず、むしろその後に見える結尾素材の方が活用される。またこの楽章のみ、トライアングルが登場する。

第2楽章 ラルゲット 変ホ長調 8分の3拍子 3部形式 実にロマンティックな美しさを持った楽章で、中ほどにはリズムミク素材も現れる。終結部ではトロンボーンが次の楽章を予告する。

第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェ ニ短調 2つのトリオを持つスケルツォ。最初のトリオのみ4分の2という珍しい拍子だが、それ以外の部分は4分の3拍子である。最後にコーダがある。

第4楽章 アレグロ・アニマート・エ・グラツィオーソ 変ロ長調 2分の2拍子 ソナタ形式 短い重要な動機を含んだ序奏の後、優雅な第1主題が現れる。これは少しユーモラスな感触もあわせ持ち、明らかにピアノ曲的な音型であ

る。そしてピアノ曲といえば、第2主題の前半には《クライスレリアーナ》op.16第8曲（フィナーレ）の主題が出現する。またこの主題の後半は序奏で聴かれたものである。再現部直前には、ホルンとフルートによる美しく詩的なカデンツァが置かれている。

（石原立教）

作曲年代：1841年1月23日～2月20日

初演：1841年3月31日 ライプツィヒ フェリックス・メンデルスゾーン指揮

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、トライアングル、弦楽5部

ストラヴィンスキー： バレエ音楽《春の祭典》

20世紀音楽の展開に多大な影響を与えたイーゴリ・ストラヴィンスキー（1882～1971）の全作品の中で特に親しまれているものといえば、初期に書かれたいわゆる3大バレエ、すなわち《火の鳥》《ペトルーシユカ》《春の祭典》が挙げられよう。これらは3作とも、ロシアの名興行師セルゲイ・ディアギレフ（1872～1929）率いるロシア・バレエ団（バレエ・リュス）のパリ公演のために書かれたものである。

ロシア芸術を西欧に紹介すべく様々な企画をパリで企てていたディアギレフは、1909年にロシアの優れた舞踏家を集めてロシア・バレエ団を結成、以後毎年パリでこのバレエ団の公演を開催するようになる。自身きわめて革命的な考えを持っていたディアギレフは新しい総合芸術としてのバレエをめざし、音楽面においても美術面においても前衛的な才能を求めた。そして1910年の《火の鳥》の作曲家として新進のストラヴィンスキーを抜擢（当初指名したアナトーリ・リャードフの仕事ぶりが気に入らなかったという経緯があったが）、その成功により2人は固い信頼関係で結ばれ、引き続き《ペトルーシユカ》《春の祭典》が生まれることとなったのである。

これら3大バレエはストラヴィンスキー初期のいわゆる原始主義時代を代表する作で、ロシア的題材をもとに、原色的な音色と強烈なリズムによって根源的なエネルギーを前面に打ち出した作風を示している。特に3作中最も遅く書かれた《春の祭典》（ロシア語の原題の意は「聖なる春」）は、斬新な楽器法、印象主義の書法を発展的に応用した大胆な和声法、そして古典的な拍節構造を破壊するような複雑精緻な前衛的リズム法といった点で、伝統的な音楽のあり方を根本から覆してしまうような革命的作品となった。

1913年5月29日パリのシャンゼリゼ劇場における初演（振付ヴァーツラフ・ニジンスキー、指揮ピエール・モントゥー）で会場が騒然となって一大事件となったのも、そうした革新性のゆえである。ヨーロッパを根底から揺るがすこととなる第1次世界大

戦（1914～18）勃発のまさに前年、ヨーロッパ音楽の伝統を土台から打ち崩すこの作品は、こうしてスキャンダラスに登場したのだった。

ストラヴィンスキーがこの作品の作曲を思いついたのは《火の鳥》作曲中の1910年のことであった。自伝によると、車座になった長老たちが見守る中で春の神をなだめるべく生贄として差し出された一人の処女が死ぬまで踊る、といった太古ロシアの異教の儀式の光景が彼の脳裏に幻影として現れたのだという。彼は異教の研究者でもあった画家ニコライ・レーリヒ（1874～1947）とともに1911年夏に台本を作り上げ、引き続き作曲に着手、先に書き上げた《ペトルーシユカ》の上演を挟んで、1913年春にこの作品を完成させた。

なおストラヴィンスキーはこの《春の祭典》の後に作風を急転回させて新古典主義へと向かうこととなる。その意味で、前衛的手法によって強烈な律動的な生命感を力強く表現することで音楽史に新しい一時代を開いたこの原始主義の極点というべき作品は、彼自身にとっては一つの時代の終わりを意味する作となったのである。

全体は2部からなる。

第1部 大地礼賛（時は昼）「序奏」は高音域のファゴットで始まる自然の神秘的な目覚めの描写。「春のきざしと乙女たちの踊り」では、不規則なアクセントと大胆な不協和音によって春を待つ乙女たちが強烈に踊る。そのエネルギーは、若い男たちが乙女を掠奪する「誘拐の遊戯」において頂点に達する。次の「春のロンド」は、重々しい土俗的な舞曲。「敵対する町の遊戯」は、2つの町の部族の争いが2つの主題によって表現される戦闘的な音楽。その最中に儀式を司る賢者が一同を引き連れて登場し（「賢者の行列」）、ひざまずいて大地に口づけする（「大地への接吻」）。そして熱狂的な「大地の踊り」で激しく第1部を閉じる。

第2部 生贄（時は夜）「序奏」は夜の情景で、生贄の儀式を感じさせるような重苦しい雰囲気を持っている。続く「乙女たちの神秘的な集い」では、民謡的な主題を持つ神秘的な踊りのうちに生贄となる乙女を選び、次の「選ばれた乙女の賛美」でその生贄の娘を激しく賛美する。「祖先の呼び出し」で金管の強烈な響きにより祖先の霊が呼び出された後、呪術的な「祖先の儀式」によって儀式的な雰囲気を不気味に盛り上げていき、そして複雑なリズムの上に生贄の乙女が死ぬまで踊り狂う「生贄の踊り」で最後のクライマックスが築き上げられる。

（寺西基之）

作曲年代：1911～13年

初演：1913年5月29日 パリ ビエール・モントゥー指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート3（第3は第2ピッコロ持替）、アルトフルート、オーボエ4（第4は第2イングリッシュホルン持替）、イングリッシュホルン、小クラリネット、クラリネット3（第3は第2バスクラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット4（第4は第2コントラファゴット持替）、コントラファゴット、ホルン8（第7、8はテナーチューバ持替）、トランペット4、小トランペット、バストランペット、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2、大太鼓、シンバル、アンティークシンバル、トライアングル、タンブリン、タムタム、ギロ、弦楽5部



第869回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.869 C Series

Series

東京芸術劇場コンサートホール

2018年12月18日(火) 14:00開演

Tue. 18 December 2018, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre



第870回 定期演奏会Aシリーズ

Subscription Concert No.870 A Series

Series

東京文化会館

2018年12月19日(水) 19:00開演

Wed. 19 December 2018, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

指揮 ● アラン・ギルバート Alan GILBERT, Conductor

チェロ ● ターニャ・テツラフ * Tanja TETZLAFF, Violoncello

ヴァイオリン ● 鈴木 学 * SUZUKI Manabu, Viola

コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

R.シュトラウス:交響詩《ドン・キホーテ》 op.35 * (40分)

R.Strauss: Don Quixote, op.35

休憩 / Intermission (20分)

ビゼー:『カルメン』組曲より(アラン・ギルバート・セレクトジョン) (20分)

Bizet: Alan Gilbert Selections from Carmen Suite

Les Toréadors	前奏曲(闘牛士)
Prélude	第1幕への序奏
Aragonaise	アラゴネーズ
Habanera	ハバネラ
Chanson du Toréador	闘牛士の歌
Intermezzo	間奏曲
Marche des contrebandiers	密輸入者の行進
Dance Bohême	ジプシーの踊り


リムスキー=コルサコフ:スペイン奇想曲 op.34 (16分)


Rimsky-Korsakov: Capriccio espagnol op.34

I Alborada	アルボラーダ
II Variation	変奏曲
III Alborada	アルボラーダ
IV Scena e canto gitano	シェーナとジプシーの歌
V Fandango asturiano	アストゥリア地方のファンダンゴ

主催: 公益財団法人東京都交響楽団

後援: 東京都、東京都教育委員会

助成:  文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)

 独立行政法人日本芸術文化振興会

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

Tanja TETZLAFF

Violoncello

ターニャ・テツラフ

チェロ



ハインリヒ・シフらに師事し、ミュンヘン国際コンクールなど数々のコンクールに入賞。マゼール、ハーディング、ノリントン、P. ヤルヴィらの指揮のもと、バイエルン放送響、パリ管、チューリヒ・トーンハレ管などのオーケストラと共演。室内楽ではフォークト、アンズネス、ロンクウィヒらと定期的に共演。兄クリスティアンらとテツラフ・カルテットを設立、活発に活動している。使用楽器は1776年製のジョヴァンニ・バティスタ・グァダニーニ。

Tanja Tetzlaff has played with leading orchestras such as Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks, Orchestre de Paris, and Tonhalle Orchester Zürich under batons of Maazel, Harding, and P. Järvi, among others. Chamber music also plays a significant part in Tanja's career, with regular appearances alongside Vogt, Andsnes, and Lonquich. She is a member of Tetzlaff Quartett. She plays a 1776 Giovanni Battista Guadagnini cello.

SUZUKI Manabu

Solo Principal Viola

鈴木 学

都響ソロ首席ヴィオラ奏者



桐朋学園大学を経てハンブルク国立音楽大学へ留学。1993～2004年、リンツ・ブルックナー管弦楽団の首席ヴィオラ奏者を務めた。2004年に帰国。ルツェルン音楽祭、サンタフェ室内楽音楽祭など数々の音楽祭にソリスト、室内楽奏者として招かれているほか、インディアナ大学マスタークラス、MMCJなどで後進の指導にあたるなど国際的に活躍。近年はプロッホのヴィオラ組曲（コンチェルト版）やエロードのヴィオラ協奏曲を日本初演するなど、ヴィオラ作品を積極的に日本へ紹介している。

Manabu Suzuki enjoys an international career as a soloist, chamber and orchestra musician. He has been invited to a number of music festivals including the Lucerne Music Festival and Santa Fe Chamber Music Festival. In 1993 he joined the Bruckner Orchester Linz and served as principal violist until his return to Japan in 2004 to begin his appointment as principal viola of the TMSO, with which he gave the Japanese premiere of Viola Suite (concert version) by E. Bloch.

R.シュトラウス： 交響詩《ドン・キホーテ》op.35

リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）が《ドン・キホーテ》op.35を構想・作曲したのは1897年の4月から12月、次作となる《英雄の生涯》op.40の構想・作曲は1896年末から1898年にかけてである。シュトラウスがこの2つの作品を同時期に手がけたのは偶然ではなく、このような発言を遺していることから明瞭だろう。

「《ドン・キホーテ》と《英雄の生涯》は、いわば一対の作品として構想したので、《ドン・キホーテ》を聴いて初めて、《英雄の生涯》を完璧に理解できるだろう」

30代そこそこの作曲家が、それまでの音楽家としての人生を回顧するかのような《英雄の生涯》と、夢とうつつの間を彷徨うかのような「自称」英雄、ドン・キホーテを同時期に描くことで、シュトラウスは何を伝えようとしたのか。

17世紀初頭に執筆された、スペインの作家ミゲル・デ・セルバンテス（1547～1616）の名作『ドン・キホーテ』。スペインの小さな村ラ・マンチャに住む騎士アロンゾ・キハーナ（「キハーン」とも表記される）は、古の騎士が活躍した、ありとあらゆる騎士道物語を涉猟するうちに、精神の平衡を徐々に失い、物語と現実世界との区別がつかなくなっていく。やがて、自身に「ドン・キホーテ」という騎士名を、痩せ衰えた愛馬に「ロシナンテ」（スペイン語で「最高の駄馬」の意）という名を与え、騎士としての冒険の旅へと旅立っていく。

シュトラウスは、ドン・キホーテに独奏チェロ、従者サンチョ・パンサに独奏ヴィオラやバスクラリネットなど管楽器をあてがい、協奏曲的な要素を併せ持つ変奏曲、という、あまり類を見ない形式を生み出した。以下、その枠組みに沿って作品の各場面を紹介し、原作に対応する箇所を示す。

序奏 冒頭、快活な主人公のモチーフが、フルートとオーボエで、二長調で描かれる。物語に登場する騎士や貴婦人を思い浮かべ、その姿と自分を重ね合わせるキハーナ。様々なモチーフが複雑に重ねられつつ、徐々に精神の明晰さを失っていく。やがて、鋭い不協和音による、曲最初のクライマックスの後、独奏チェロが描くキハーナ改めドン・キホーテの主題は、曲冒頭の主題が二長調から二短調へと変化したもので、狂気に沈んだ人間の哀れさと滑稽さが巧みに表現されている。主人に付き従う農夫サンチョ・パンサは、独奏ヴィオラで、ところ構わず喋りまくる愛嬌ある姿が描かれる。

第1変奏（前編・第8章） 独奏チェロで開始。ドン・キホーテは眼前にそびえる風車を巨人の群れと思い込み、果敢に突撃する（独奏チェロの上昇音型）が、

風車の羽が回転しはじめるとあえなく落馬（ハーブの下降グリッサンド）。

第2変奏（前編・第13章） 砂ぼこり（分割されたヴィオラ・パートのトレモロとトリル）の中、羊の大群（金管とクラリネットのフラッタータンギング※1）を発見する主従。この羊の群れを、ドン・キホーテは大軍勢同士の会戦と考え、一方の軍隊に戦いを挑む。暴れ回る羊たち。クラスター書法とも呼ぶべき大胆な音楽での描写ぶりに、初演当時は批判が相次いだという。

第3変奏（対応エピソードなし） 曲冒頭のモチーフがフルートとオーボエで再現される。サンチョがあまりに饒舌に語るため、無口こそ美德と考えるドン・キホーテが、自身の理想を説いてきかせる。だがサンチョの反応は「え、何ですって?」（バスクラリネットの短いソロ）。

第4変奏（前編・第52章） 懺悔（ざんげ）の行列（金管とファゴットのコーラル）が押しただく聖母像を、囚われの身にある貴婦人と思い込んだドン・キホーテは救出に向かうが、あえなく返り討ちに遭い、殴られて気を失ってしまう（弦合奏の下降音型）。サンチョは主人が死んでしまったと嘆くが、その声をきいて意識を取り戻す。

第5変奏（前編・第3章） ドン・キホーテは貴族の城塞へ赴き（実際は村の宿屋）、ここで一日寝ずの番をして、貴族に騎士として認めてもらおうとする（独奏チェロ）。月明かりが降り注ぐ（ハーブのグリッサンド）中、まだ見ぬ愛しの貴婦人に思いを馳せる。

第6変奏（後編・第10章） ドン・キホーテはエル・トポゾに住む愛しの貴婦人ドゥルシニアに会いに行く。彼女は実在しないと考えたサンチョは探そうとせず、機転を利かせ、おしゃべりをしながら歩いてくる3人の田舎娘を貴婦人とその侍女に仕立てる（主従2人と娘3人＝5拍子／木管合奏）。娘たちの前に大仰に平伏するドン・キホーテ。彼女らは驚いて走り去る。

第7変奏（後編・第41章） 主従の噂を聞いた公爵夫妻が2人をからかうべく、天を駆ける馬に乗って、囚われの娘を救ってほしいと請う。2人は目隠しをされ、木馬にまたがらせられ、召使いたちが起こす風にもまれる（ウィンドマシーン）。実際に木馬が地に着いている様子は、コントラバスがD音のトレモロを常に保持し続けることで描かれる。

第8変奏（後編・第29章） 川の岸辺にある小船に乗り（ファゴットとチェロに始まるさざ波の音型）、城塞（実際は水車小屋）に囚われたスペインの王子（実在しない）を救出しようとする。しかし水車に巻き込まれて大破し、川に投げ出される。ずぶ濡れになり、水しずくをばらう2人（弦楽器のピッツィカート）。

第9変奏（前編・第13章） ベネディクト派の修道士2人（ファゴット二重奏）をいかがわしい魔術師と思い込んだドン・キホーテは襲いかかるが、その従者に殴られる。

※1 フラッタータンギング

管楽器の特殊奏法。舌を震わせながら吹き、弦楽器のトレモロのような効果を出す。

第10変奏（後編・第50章） 隣に住む友人サムソン・カラスコは、ドン・キホーテを救い出すべく、自らも騎士に扮して決闘を申込み、勝利する（管楽器の勇壮な合奏）。ドン・キホーテはカラスコの求めに従い、故郷ラ・マンチャで、羊飼いととしての生活に戻る（イングリッシュホルンによる羊飼いの笛）。

フィナーレ（後編・第64章） 再び自分を取り戻したキハーナ（ニ短調→ニ長調へ戻る独奏チェロ）。だが、旅の過酷さはその健康をむしばんでいた。死の床についたかつての騎士は、数々の冒険を回想しながら息を引き取る。

この主人公は決して成長を見せることはなく、主人公その人を描く主題は、ただ形を変えて繰り返されるだけである。ニ長調の冒頭主題に始まり、様々な冒険を経験しながらも、結局、同じ調、同じ主題で終わるこの曲は、ベートーヴェン以来のソナタ形式が目指す発展とは無縁でもあり、だからこそ変奏曲という形式が選ばれたのだろう。《英雄の生涯》でも同じように、挫折した「英雄」の姿が描かれた。深い挫折感を抱えたドン・キホーテの姿に、作曲家として指揮者として、当時いまだ大きな成功を収めるに至らないシュトラウスが大きな共感を寄せ、自身のありようを投影し、それを表現してみせた作品ということになる。

（広瀬大介）

作曲年代：1897年4月～12月29日

公開初演：1898年3月8日 ケルン

フランツ・ヴェルナー指揮 ケルン・ギェルツェニヒ管弦楽団

独奏チェロ／フリードリヒ・グリユッツマツヒャー

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2（第2は小クラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット3、トロンボーン3、テナーチューバ、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、タンブリン、グロッケンシュピール、ウインドマシーン、シンバル、トライアングル、ハープ、弦楽5部、独奏チェロ、独奏ヴィオラ

ビゼー：

『カルメン』組曲より（アラン・ギルバート・セレクション）

フランス・オペラの代表作『カルメン』はジョルジュ・ビゼー（1838～75）の最後のオペラである。1875年3月オペラ・コミック座での初演こそ不評だったが、その後急速にこの作品は認められ、このシーズンだけで数十回も上演された。オペラでの成功という彼にとっての長年の宿願がやっと遂げられたわけだが、初演後体調を崩した彼は同年6月3日、37歳で夭折する。

作品はプロスペル・メリメ（1803～70）の小説をもとにリュドヴィク・アレヴィ（1834～1908）とアンリ・メイヤック（1831～97）が共同で作った台本によっている。物語の舞台はスペイン。竜騎兵ドン・ホセは純情な恋人ミカエラがいるにもかかわらず、情熱的なロマ（ジプシー）女カルメンに心を奪わ

れ、彼女のそばにいたいがために密輸入団に加わってしまう。しかしカルメンは花形闘牛士のエスカミーリオに心を移し、怒ったドン・ホセはカルメンを刺し殺す。

ビゼーの音楽は迫真的で、人物の性格と心理の描写、物語の状況の的確な表現法、スペインの雰囲気の出、歌唱の表出力、雄弁な管弦楽の用法など、劇音楽作家としての彼の才能がいかに発揮された作品だ。本来オペラ・コミック(※2)の様式の作品で、作曲家死後に友人であるエルネスト・ギロー(1837～92)がグランド・オペラ(※3)用に改編したが、いずれにせよこのオペラのリアリスティックな特質は、ただ華麗なだけの効果を狙う傾向のあった当時のフランス・オペラに新風を吹き込んだばかりでなく、イタリアのヴェリズモ・オペラ(現実主義オペラ)にも影響を与えた。

聴きどころを抜粋した管弦楽用の組曲は、1890年代にシューゲン社から出た2つの組曲版(上述のギローの改訂版を元にしたと思われる)を皮切りに、1910年代にはブライトコプフ社からフリッツ・ホフマンの手による2つの組曲が出されたほか、ロベール・ディディオン編による近年のオイレンブルク新版まで、幾つか版が存在する。ビゼー自身が関わったものではないため構成も楽器法も異同があり、特に決定版というものはない。本日はアラン・ギルバートの選曲による以下の8曲が演奏される。

前奏曲(闘牛士) オペラ全曲の前奏曲の前半部分で、オペラ本編では第4幕の闘牛士入場の行進曲。

第1幕への序奏 前奏曲の最後の部分。オペラではカルメンの運命を示す主題として用いられる。

アラゴネーズ 第4幕への間奏曲で、この幕の闘牛場の場を先取りする激しい曲調を持つ。アラゴネーズとはスペインのアラゴン地方の舞踏。

ハバネラ 第1幕でカルメンが舞曲ハバネラのリズムに乗って「恋は自由だ」と歌う有名なアリア。

闘牛士の歌 第2幕、酒場に闘牛士エスカミーリオが現れて颯爽と歌う勇ましいアリア。中間部の旋律は前奏曲にも用いられている。

間奏曲 第3幕への間奏曲で、ビゼーの叙情的な側面を示す美しい音楽。

密輸入者の行進 第3幕の幕開けで密輸入者たちが山中を忍びながら歩く場面の行進曲。

ジプシーの踊り 第2幕の幕開け、酒場でカルメンが歌いながら仲間らと踊る場面の曲で、次第に熱狂を加えていく。

(寺西基之)

※2 オペラ・コミック 歌以外にセリフも用いるフランスのオペラ。喜劇的で軽い内容のものが多かったが、後にシリアスな悲劇も作られた。

※3 グランド・オペラ 19世紀前半にフランスで流行した大規模なオペラ。スペクタクルな舞台効果が特徴で、セリフはなくレチタティーヴォを用いる。

作曲年代：オペラ全曲／1873～74年

初 演：オペラ全曲／1875年3月3日 パリ

楽器編成：フルート2（第2はピッコロ持替）、オーボエ2（第2はイングリッシュホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、ハーブ、弦楽5部

リムスキー＝コルサコフ： スペイン奇想曲op.34

ニコライ・リムスキー＝コルサコフ（1844～1908）は「力強い仲間（ロシア5人組）」の一人として活躍した。「奇想曲」は「カプリッチョ（capriccio）」の訳で、「気まぐれな曲」という意味。スペインの民謡や舞曲を素材にして、自由な形で書かれた管弦楽曲である。1887年に作曲され、作曲者自身の指揮で初演された。

曲は、3つの舞曲が2つの民謡を挟んで並ぶ形になっていて、5つの部分は切れ目なく演奏される。ここで使われた素材は、スペインの民謡と舞曲を集めた曲集から採ったもので、リムスキー＝コルサコフが創作したものではない。それらを巧みに並べた構成力と色彩感豊かなオーケストレーションによって、魅力的な名曲に仕立て上げられている。リムスキー＝コルサコフは、海軍軍楽隊の監督官を務めた経験から、伝統に囚われない近代的な管弦楽法を考案し、「管弦楽法の大家」と呼ばれるまでに至った。この《スペイン奇想曲》でも、そんな彼の達者な楽器用法が遺憾なく発揮されており、総天然色の華やかな色遣いを存分に楽しむことができる。

曲の内容は以下の通り。第1曲は「朝の歌」という意味の「アルポラーダ」。スペイン北部アストゥリア地方の踊りで、朝まで遊び通したかのような、いかにもスペインらしい陽気なダンスの様子が描かれている。第2曲は、同じアストゥリア地方の「タベの踊り」という歌による「変奏曲」。ホルンの叙情的なメロディで開始し、様々な楽器の組み合わせで変奏されてゆく。第3曲は第1曲と同じ「アルポラーダ」。第1曲よりも調性は半音高く、楽器用法も異なる。

第4曲はアンダルシア地方の情熱的なロマ（ジプシー）の歌による「シェーナとジプシーの歌」。ヴァイオリン、フルート、クラリネット、ハーブなどいろいろな楽器の名人芸が聴きもの。第5曲は「アストゥリア地方のファンダンゴ」。「ファンダンゴ」とは、フラメンコで男女で踊るダンスのこと。スペイン情緒たっぷりのカスタネットなどのリズムに乗って踊りが繰り返され、最後は華やかなクライマックスを迎えて終わる。

（佐伯茂樹）

作曲年代：1887年夏

初 演：1887年10月31日（ロシア旧暦10月19日） サンクトペテルブルク 作曲者指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2（第2はイングリッシュホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、カスタネット、タンブリン、ハーブ、弦楽5部

KOIZUMI Kazuhiro

Honorary Conductor for Life

小泉和裕

終身名誉指揮者

12/24 12/25 12/26



© 堀田力丸

東京藝術大学を経てベルリン芸術大学に学ぶ。1973年カラヤン国際指揮者コンクール第1位。これまでにベルリン・フィル、ウィーン・フィル、バイエルン放送響、ミュンヘン・フィル、フランス放送フィル、ロイヤル・フィル、シカゴ響、ボストン響、モントリオール響などへ客演。新日本フィル音楽監督、ウニペグ響音楽監督、都響指揮者／首席指揮者／首席客演指揮者／レジデント・コンダクター、九響首席指揮者、日本センチュリー響首席客演指揮者／首席指揮者／音楽監督、仙台フィル首席客演指揮者などを歴任。

現在、都響終身名誉指揮者、九響音楽監督、名古屋フィル音楽監督、神奈川フィル特別客演指揮者を務めている。

Kazuhiro Koizumi studied at Tokyo University of the Arts and at Universität der Künste Berlin. After winning the 1st prize at Karajan International Conducting Competition in 1973, he has appeared with Berliner Philharmoniker, Wiener Philharmoniker, Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks, Orchestre philharmonique de Radio France, Chicago Symphony, Boston Symphony, and Orchestre symphonique de Montréal, among others. Currently, he serves as Honorary Conductor for Life of TMSO, Music Director of Kyushu Symphony, Music Director of Nagoya Philharmonic, and Special Guest Conductor of Kanagawa Philharmonic.

T 都響スペシャル「第九」

TMSO Special "Beethoven's 9th"

TMSO

東京芸術劇場コンサートホール

2018年12月24日(月・振) 14:00開演

Mon. 24 December 2018, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

2018年12月25日(火) 19:00開演

Tue. 25 December 2018, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

東京文化会館

2018年12月26日(水) 19:00開演

Wed. 26 December 2018, 19:00 at Suntory Hall

サントリーホール

- 指揮 ● 小泉和裕 KOIZUMI Kazuhiro, Conductor
ソプラノ ● 安井陽子 YASUI Yoko, Soprano
メゾソプラノ ● 富岡明子 TOMIOKA Akiko, Mezzo-Soprano
テノール ● 福井 敬 FUKUI Kei, Tenor
バリトン ● 甲斐栄次郎 KAI Eijiro, Baritone
合唱指揮 ● 増田宏昭 MASUDA Hiroaki, Chorus Master
合唱 ● 二期会合唱団 Nikikai Chorus Group, Chorus
コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

ベートーヴェン：交響曲第9番 二短調 op.125 《合唱付》(65分) Beethoven: Symphony No.9 in D minor, op.125, "Choral"


- I Allegro ma non troppo, un poco maestoso
II Molto vivace - Presto
III Adagio molto e cantabile
IV Presto - Allegro assai

本公演に休憩はございません。

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

協賛： 有限会社 共済企画センター (24日)

 (25日)

株式会社シャトレーゼ (26日)

演奏時間は予定の時間です。

YASUI Yoko

Soprano

安井陽子

ソプラノ



桐朋学園大学、同大学研究科および二期会オペラ研修所マスタークラス修了。ウィーン国立音楽大学研究課程修了。クラーゲンフルト市立劇場、ブレゲンツ音楽祭などに出演。国内では東京二期会『ナクソス島のアリアドネ』ツェルビネッタ、新国立劇場『ファルスタッフ』ナンネッタ、『ホフマン物語』オランピア、『魔笛』夜の女王などで好評を博した。コロラトゥーラの見事な歌唱と豊かな音楽表現で聴衆を魅了している。二期会会員。

Yoko Yasui studied at Toho Gakuen School of Music, Nikikai Opera Studio, and Universität für Musik und darstellende Kunst Wien. She has appeared at Stadttheater Klagenfurt and Bregenzer Festspiele, among others. Yasui has performed as Zerbinetta in *Ariadne auf Naxos*, Olympia in *Les Contes d'Hoffmann*, Nanetta in *Falstaff*, and Königin der Nacht in *Die Zauberflöte*. She is a member of Nikikai.

TOMIOKA Akiko

Mezzo-Soprano

富岡明子

メゾソプラノ



東京藝術大学、同大学院修了。パルマ音楽院を首席にて学位取得。日本音楽コンクール第2位。ベリッツオーニ国際音楽コンクールなどで入賞多数。パルマ歌劇場『試金石』、ペーザロ・ロッシーニ音楽祭『ランスへの旅』、小澤征爾音楽塾およびサイトウ・キネン・フェスティバル松本『セビリアの理髪師』、東京二期会『カヴァレリア・ルスティカーナ』『イル・トロヴァトーレ』などで活躍。「第九」や宗教曲のソリストとしても評価が高い。二期会会員。

Akiko Tomioka graduated with her Bachelor's and Master's Degrees from Tokyo University of the Arts. She studied at Conservatorio di Musica "Arigo Boito" di Parma, Italy. She has sung in *La Pietra di Paragone* at Teatro Regio di Parma, *Il Viaggio a Reims* at Rossini Opera Festival in Pesaro, *Il Barbiere di Siviglia* in productions directed by Ozawa, and *Il Trovatore* at Nikikai Opera. She is a member of Nikikai.

FUKUI Kei

Tenor

福井 敬

テノール



国立音楽大学および同大学院、文化庁オペラ研修所修了。その後イタリアへ留学。第20回イタリア声楽コンクールソミラノ大賞（第1位）。二期会『ラ・ボエーム』ロドルフォで鮮烈なデビューを果たして以来、わが国のトップ・テナーとしての地位を確立。輝かしい声と情感溢れる演技は多くの国際的指揮者、演出家たちから絶大な信頼を集めている。国立音楽大学准教授。第65回芸術選奨文部科学大臣賞（2014年）など受賞多数。二期会会員。

Kei Fukui obtained Master's degree in Kunitachi College of Music and continued his studies at Opera Institute. He studied further in Italy. He won the Milan Award at the 20th Concorso di Lirica Italiano. Fukui has been active as a leading tenor in Japan. He received the 2014 Minister of Education Award for Fine Arts. He is an associate professor of Kunitachi College of Music and a member of Nikikai.

KAI Eijiro

Baritone

甲斐栄次郎

バリトン



東京藝術大学卒業、同大学院修了。文化庁オペラ研修所修了。ティト・スキーパー・コンクール第1位。五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。ニューヨークとボローニャでの研鑽を経て、2003年から10年にわたりウィーン国立歌劇場の専属ソリストとして契約、シャープレス、マルチェッロ、レスコー、エンリーコ、ノッティンガム公爵等で活躍。東京藝術大学准教授。聖徳大学客員教授。洗足学園音楽大学客員教授。二期会会員。

Eijiro Kai graduated from Tokyo University of the Arts and obtained a Master's degree at the same university. He studied in New York and Bologna. Kai made his Wiener Staatsoper debut in 2003 and performed as Sharpless, Marcello, Lescaut, Enrico, and Duca di Nottingham, among others. He is also active in concert appearances which include *Messiah*, Beethoven's Symphony No.9, *Mša Glagolskaja* and *Ein Deutsches Requiem*. He is a member of Nikikai.



都響スペシャル「第九」（2017年12月24日／東京芸術劇場／大野和士指揮 二期会合唱団 他）

「二期会」は1952年に誕生、現在では2700名を超える会員を擁する、世界でも類をみない声楽家団体に成長した。「二期会合唱団」は1953年に結成された、我が国最初にして最古のプロフェッショナル合唱団。活動の中心を二期会オペラ公演に置きつつ、主要オーケストラへの客演や独自の演奏会など、多岐にわたる活動を展開している。都響とは恒例の都響スペシャル「第九」で共演を重ねているほか、2012年には「新・マラー・ツィクルス」に参加、交響曲第2番《復活》および交響曲第3番に出演した。


Nikikai Chorus Group, the first professional chorus group in Japan, was established in 1953. Centering its activities in opera performances, Nikikai Chorus Group also makes guest appearances with major orchestras, gives original concerts and performs in schools. The chorus appears regularly with TMSO at concerts of Beethoven's Symphony No.9.

MASUDA Hiroaki

Chorus Master

増田宏昭

合唱指揮



東京藝術大学音楽学部ピアノ専攻卒業。同大学大学院指揮科修了。バイエルン州立歌劇場でサヴァリッシュ、パタネーらのもとで研鑽を積んだ。1987年以降、ドイツの歌劇場でキャリアを重ね、コブレンツ劇場首席指揮者、ザールランド州立劇場首席指揮者、ノルトハウゼン劇場およびゾンダースハウゼンLOH管弦楽団音楽総監督などを歴任。

Hiroaki Masuda graduated from Tokyo University of the Arts and obtained a master's degree at the same university. He studied in München. Masuda was formerly Principal Conductor of Theater Koblenz, Principal Conductor of Saarländisches Staatstheater, and General Music Director of Theater Nordhausen/Loh-Orchester Sondershausen.

ベートーヴェン： 交響曲第9番 二短調 op.125《合唱付》

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が完成した最後の交響曲であり、交響曲に声楽を取り入れて成功した最初の記念碑的名作である。ちなみに作曲者は、「シラー作の頌歌『歓喜に寄す』を最後の合唱に用いた大管弦楽と4声の独唱・合唱のための交響曲」とスコアへ記している。また交響曲とカンタータを融合させたような形式が、後代の声楽を伴うロマン的で巨大な交響曲のルーツとなり、あたかも古典派とロマン派の分水嶺的な存在となった点に、大きな歴史的意義を持つ。

さて、この交響曲が完成されたのは1824年だが、既にその四半世紀ほど前から、ベートーヴェンはフリードリヒ・フォン・シラー（1759～1805）の「歓喜に寄す」という詩に作曲する計画を温めていた。実際に、あの有名な「歓喜のメロディ」の原型は、1794～95年に書かれた歌曲《愛されぬ者の嘆息》WoO118に早くも見られるし、《合唱幻想曲》op.80にも明瞭に認められる。

また第1楽章の素材は、交響曲第2番二長調op.36の序奏や序曲《献堂式》op.124にも聴かれる。ともあれ、それが次第に形になってきたのは1817年頃と推定されるが、1818年から22年までは《莊厳ミサ曲》op.123などの作曲に集中したため、しばらくこの交響曲の作曲は中断されてしまった。ようやく本格的な作曲が始まったのは1822年で、折しもロンドンのフィルハーモニー協会から新作交響曲の委嘱があり、これによりベートーヴェンはついに、かねてより構想を温めていた実験的な作品を完成することにしたのである。

ちなみにベートーヴェンが作曲したのは、シラーの詩のすべてではなく第4節までで、それ以外は自作の詩（終楽章で最初にバリトンが独唱する部分）によるものである。興味深いことに当初ベートーヴェンは、現在と違って、終楽章も器楽のみで終わらせたいと考えていたらしく、声楽は次の《ドイツ交響曲》で導入する予定であったらしい。しかしそのプランは断念され、器楽用の終楽章は弦楽四重奏曲第15番イ短調op.132に転用された。

なお大成功に終わった初演に際しては、耳が聞こえぬにもかかわらず指揮をしていたベートーヴェンが、演奏が終わっても観客の大歓声に気づかなかったため、見かねたアルト歌手のカロリーネ・ウンガー（1803～77）が客席の方にベートーヴェンを向け、その成功を知らせたという感動的な逸話が残っている。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo、ウン・ポコ・マエストーソ 二短調 4分の2拍子 ソナタ形式 神秘的な空虚5度が響く中、第1主題の断片が示され、徐々にその巨大な全貌が明らかにされていく独創的な開始で、後年のブルツ

クナーに顕著な影響を与えている。第2主題は木管楽器の上行する跳躍音型に、弦楽器が慎ましくからみ合うもの。また上へ下へと駆け巡る音階も耳につく。再現部冒頭は、これまでの交響曲が経験したことのない凄絶で劇的な響きに満ちている。

第2楽章 モルト・ヴィヴァーチェ〜プレスト ニ短調 4分の3拍子 3部形式 運動性の強い圧倒的なスケルツォであり、主部は総奏の後のフーガによって進行しながらも、第1主題と第2主題を持つソナタ形式でもあるという、極めて緻密で技巧的な構成となっている。そして交響曲第8番へ長調op.93と同じように、ティンパニは8度に調律され、華々しい活躍をする。トリオは牧歌的であるが、終楽章の「歓喜のメロディ」に似た音階的な音型が現れる。トロンボーンはこの楽章と終楽章に使用されている。また交響曲の第2楽章にスケルツォが配された稀な例でもある。

第3楽章 アダージョ・モルト・エ・カンタービレ 変ロ長調 4分の4拍子 冒頭の主題とニ長調の第2主題による変奏曲で、もはや形容すべき言葉のないほど天国的な美しさを持つ。円熟した管弦楽法と精妙な変奏により、崇高なまでに浄化された世界へと我々を誘う。おそらくベートーヴェンが書いた最も美しい音楽の一つなのではあるまいか。しかしこの平安は、何かを警告するかのような2度にわたる金管楽器のファンファーレによって打ち碎かれる。

第4楽章 プレスト〜アレグロ・アッサイ 全曲の頂点を成す楽章で、一種のカンタータであり明白な形式は持たないが、おおそ8つの部分によって接続曲的に構成されている。まず強烈な不協和音によるファンファーレが劇的に奏され、低弦のレチタティーヴォが第1楽章から第3楽章までの主題を次々に否定していく。ついにグレゴリオ聖歌（聖木曜日のアンティフォーナ）に基づく歓喜のメロディの断片が奏された後、低弦によって、弱い音でシンプルに歓喜のメロディが奏される。それは次第に力を増し、ついには壮麗極まる総奏となる。すると再び、混沌たる不協和音が叩きつけられ、初めてバリトン独唱が声をあげる（前述のように、この部分の詩はベートーヴェン自身の創作である）。続いて合唱やソプラノ、アルト、テノールの独唱も参加するが、それ以後は変奏曲風に進められ、トルコ風マーチの男声合唱、荘厳なコラルと作曲技術の冴えを示す二重フーガ、ソロの四重唱を経て、白熱的な終結を迎える。

(石原立教)

作曲年代：1822～24年

初演：1824年5月7日 ウィーン ケルトナートーア劇場

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、弦楽5部、独唱（ソプラノ、メゾソプラノ、テノール、バリトン）、混声4部合唱